

## はじめに

義務教育9年間の教育内容は、「子どもに学んでほしいこと」が濃縮されたものです。何を身に付けていけばこれからの社会を幸せに生きていけるかは、誰も確かには分からない。それでも、子どもたちに幸せな人生を歩んでほしいと願わずにはいられない。これまでと今の社会を生きてきた大人の良心の結晶として、この時期に、この学びには触れてほしい、という思いを込めたものが、義務教育です。

このため、小・中学校の教育内容は、「子どもが学びたいこと」だけで構成されているものではありません。その日の子どもが「学びたいと思っていること」だけでなく、「その時の子ども自身は学ぶ意義を感じていないこと」や「学校の授業でなければ触れることがなかったかもしれないこと」などを学ぶところに、義務教育としての学校教育の意義があります。

だからこそ、「教えさえすれば、子どもは、当然に学ぶ」のでは「ない」ことを前提として、その日の授業を子どもの学びにつなげようと、目の前の子どもの状況に応じた仕掛けや指導などをする教師の力が学校教育の要となります。

子どもは、教えたように育つのではなく、学んだように育ちます。授業を通じ、「明日も学校に来て、先生の授業を受けたら、何かいいことがありそう。」と、子どもを学びにときめかせることが、義務教育を支え、子どもの幸せを支えます。

子どもの言動には全て理由があります。子どもの発達段階等に応じて、その理由を子ども自身が明確に意識したり言葉にできたりするかどうかは様々ですが、子どもほど、学ぶことに対して純粋で、かつ、自分が受けた影響に対して正直に反応する者はいません。

授業を受ける目の前の子どもは教師自身の鏡であると意識し、子どもに「学びのときめき」をもたらす授業を展開する一助として、本冊子が活用されることを願っています。

